

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 日中両言語の副詞節の非従属化構文の言語形式と談話機能
— 認知類型論の観点から —
氏 名 江 俊 賢

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、認知・機能言語学の立場に立ち、認知類型論のアプローチから、日中両言語における「副詞節(従属節)のみで発話される言語形式(以後、「副詞節の非従属化構文」)」に着目し、その談話機能を考察するものである。本研究では、中国語(北京官話や台湾華語)の条件節「如果(*rúguǒ*)」、譲歩節「雖然(*suīrán*)」、理由節「因為(*yīnwèi*)」などの副詞節の非従属化構文を研究対象とし、上述の副詞節に対応している日本語の条件節「タラ・レバ」、譲歩節「ケド」、理由節「カラ」の非従属化構文との対照研究を行った。本研究の 4~6 章では、中国語の副詞節の非従属化構文は、「断言回避」や「話の唐突さを緩和する」などの対人的機能を果たすために、ある文脈において副詞節のみで発話する形式を選択することが明らかになった。また、第 7 章では「談話の左と右の周辺部の談話機能(*discourse functions at the left and right periphery*)」から分析し、日中両言語の従属的マーキングの生起位置と談話機能の違いも明らかにした。全体は 8 章から成る。

第 1 章では、本研究の研究背景、研究目的、そして研究方法とデータについて述べた。これまでの副詞節構文の談話表現についての研究は、日本語においてすでに多く研究されており、「タラ・レバ節(条件節)/ケド節(譲歩節)/カラ節(理由節)」の語用論的効果や対人的機能に着目しているものが多い。それに対して、管見の限り、中国語の条件節、譲歩節、理由節などの副詞節のみで発話される表現についての研究は依然として数が少ないと見られた。また、従来の研究で、ヘッジ表現やポライトネス用法に機能拡張したことが多いと指摘されてきた日本語に対して、中国語の副詞節のみで発話される表現は、談話において、どんな談話機能を担っているのだろうか。本研究は主に日本語の副詞節の非従属化構文の談話表現の研究成果を援用し、中国語の用法を分析する。また、中国語との対比により日本語の特徴についてもより明らかにし、英語や韓国語などの他の言語との対比により、日中両言語の副詞節構文の談話表現の差異を類型論の観点から分析した。

第 2 章では、本研究の理論的背景である「認知類型論(*cognitive typology*)」、「(問)主観性(*(inter)subjectivity*)」、「談話分析(*discourse analysis*)」を概観した上で、本研究で分析対象とする非従

属化構文の現象について、「認知類型論」の理論的枠組みと「談話分析」の手法で分析することが有効であることを提示した。ホッパー(2011)は「言語形式を自然に生起する文脈内において検討するならば、構造は創発的なものとしてのみ見られる」と指摘している。すなわち、本研究で取り上げている日中両言語の副詞節の非従属化構文は副詞節であるのみならず、談話機能を表す創発的な表現とみてもよいと考えられる。具体的に、本研究では、中国語の「雖然」、「因為」、「如果」の副詞節構文はどのような談話文脈で用いられているのか、日本語と他の言語との差異という主要な問題が見られる。本研究はこれらの問題について、談話コーパスから日中両言語の用例を収集し分析することを通して、談話中に繰り返し生じる副詞節の非従属化構文の使用パターンを考察した。なお、談話における副詞節の非従属化構文のような創発的な表現を分析するために、本研究は、Schiffrin(1987)の談話モデルにおける「概念的構造(命題の意味内容に関わり)」、「参与者構造(談話参与者の関係に関わり)」、「行為構造(発話行為に関わり。e.g. 話題転換)」、「やりとり構造(話順交代システムに関わり。e.g. 話順取り)」、「情報状態(e.g. 聞き手が理解を達成するために、付随、あるいは派生する知識を提供する)」という5つの面から、日中両言語の非従属化構文の談話機能の違いを考察している。

第3章は非従属化構文に関する先行研究について述べた。非従属化構文の先行研究において、日本語は接続助詞の「ケド」「カラ」「タラ・レバ」が終助詞化し、対人的機能に拡張していることが示されている。一方、中国語の非従属化構文に関する先行研究では、複文の接続詞に関する考察が多く見当たらず、その代わりに、動詞の副詞化、コピュラの省略、或いは副詞の終助詞化で、文法化の観点から分析されているものが多いと見られる。第3章では日本語と中国語の非従属化構文の先行研究を概観した上で、次の三つの問題点を挙げている。(i) 日本語、韓国語、チャバラ語、ウラル語等の言語のように、形式的に「従属節+主節」の複文構造と明確な従属的マーキングを持っている言語は非従属構文を産出しやすいと Evans & Watanabe(2016)は指摘している。しかし、中国語も上記の「従属節+主節」と従属節と主節との論理的関係を示す接続詞の「雖然／因為／如果」を持っているものの、日本語、韓国語のような非従属化構文の現象が発達していない。(ii) 日本語、韓国語のような「右方主要部型言語(right-headed languages, RHL)」では接続助詞の位置が「従属節+接続助詞」となっている。これに対して、英語、フランス語、オランダ語、中国語のような「左方主要部型言語(Left-headed languages, LHL)」は「接続詞+従属節」となっている。しかし、中国語は同様に「接続詞+従属節」という構造である英語、フランス語、オランダ語に比べ、主節の省略の現象が発達していないことを観察した。(iii) 日中対照研究の先行研究について、日本映画(中国語吹替)を分析対象とした李(2008)や『中日対訳コーパス』を対象とした田(2015)はどちらも自然会話のデータではないと考えられる。しかし、従属節形式のみの発話は談話における創発的表現であると考えられる(Heine et al. 2016)。これらの創発的表現を分析するために、「自然データ」が不可欠であると思われる。そのため、本研究は対訳コーパスまたは映画の吹替のデータの利用ではなく、自然談話のコーパスにおける副詞節構文の言語形式の発話を分析対象とする。

第4章では、日中両言語の条件節構文の分析を行った。その結果、まず、両言語ともに、条件節

のみの言語形式で、「先行談話に対する条件提示」という談話の情報構造に関わる用法があることがわかった。一方、対人的動機づけについて、日中両言語はどちらも条件節構文を通して、聞き手により詳しい情報を要求する用法が見られた。しかし、非選好的応答の談話の環境において、日中両言語には相違点が見られた。例えば、「評価モダリティー」を担う形式から対人的機能への機能拡張について、日本語の条件節構文は談話の文脈に依存せず、話し手の評価的感情を聞き手にもちかけ、「勧め」の用法に機能拡張している。それに対して、中国語の条件節構文は評価を表すモーダル機能から「聞き手の評価に対する(不)同意」を示すことに機能拡張している。しかし、中国語の条件節構文は「聞き手の評価に対する(不)同意」という対人的機能に機能拡張するために、先行する談話の文脈に依存しなければ、形式と意味的に不完全文になることが明らかになった。そのため、日中両言語の間主観性も異なっており、日本語は「聞き手に選択の余地を残し、話し手の押し付けがましさを軽減させる」間主観性、中国語は「断言回避」の間主観性を表している。本章の分析結果からみると、日中両言語の条件節構文の間主観性がある対人的動機付けにおいて、日本語の条件節構文は構文自体が「勧め」の対人的機能に特化している。一方、中国語の条件節構文においては、Schiffrin の談話モデルにおける「概念的構造」を維持することが優先であり、その後、「聞き手の評価に対する(不)同意を表す」対人的機能に機能拡張していることを明らかにした。

第5章では、中国語の「雖然」節構文と日本語のケド節構文の分析を行った。その結果、まず、両言語ともに、従属節のみの言語形式で、「先行談話への情報補足／自己修正」や「部分的同意」などの談話の情報構造に関わる用法があることが判明した。しかし、日本語のケド節構文は「先行談話への自己修正／情報補足」の機能から、さらに「聞き手の認識状態を変えて結果的に何らかの行動を促そうという態度を明示的に示す(白川 2009)」という対人的機能に機能拡張していることが明らかになった。それに対して、中国語の「雖然」節構文は聞き手に何らかの行動を促そうという態度を示していない。このことは日中両言語の譲歩節構文は「先行談話への自己修正／情報補足」を担う機能があるが、ケド節構文は「雖然」節構文で訳すことができないということを説明している。一方、「話題導入」の機能から「話の唐突さを緩和する」という対人的機能への機能拡張について、「雖然」節構文はケド節構文と異なっていることがわかった。「ケド」節構文は先行談話との関連性がなくても、新たな話題を導入し、「話の唐突さを緩和する」機能を果たすことが可能である。それに対して、「雖然」節構文は「話題導入」による「話の唐突さを緩和する」機能を果たすために、話し手が先行談話に対する対比または譲歩の意味を保ちながら、会話の中に導入していかなければならないことが明らかになった。すなわち、「雖然」節構文は談話の対人的機能を果たすために、Schiffrin の談話モデルの「概念的構造」を保持しなければならないという特徴が判明している。

第6章では、日中両言語における理由節構文の分析を行った。その結果、まず、日中両言語ともに、主節がない理由節の使用で、先行談話に対する「理由の説明／相手の意見との同調／質疑応答」と「話者自己開始」の理由節による話題を展開させるという談話の情報構造に関わる用法が明らかになった。一方、対人的動機づけについては、日中両言語には相違点明らかになった。「先行談話にある聞き手の認識への修正」において、中国語は「因為」節構文で相手の認識を改めさせる効果

があるが、日本語のカラ節構文は、話し手が聞き手の認識を改めさせる効果だけではなく、聞き手に何らかの行為を実行させるニュアンスも含んでいる。

また、理由節構文の「新情報を導入する」という談話機能において、Schiffrin の談話モデルの観点からみると、日中両言語はどちらも「概念的構造(論理的因果関係)」が希薄化しているが、「行為構造」の発話行為は異なっている。「因為」節構文は話題を導入する機能を果たしていることに対して、カラ節の多くの例は話題を導入する機能だけではなく、さらに聞き手に何らかの行為の実行を要求しているニュアンスがあることを明らかにした。なぜ日中両言語において上述の談話機能の違いがあるかについて第7章で分析している。

第7章では周辺部の形式・談話機能の特徴を敷衍し、日中両言語の従属的マーキングの生起位置とその談話機能を分析した。分析の結果、中国語の副詞節の非従属化構文の従属的マーキングは左の周辺部の位置に現れ、「焦点化・話題化・フレーム化(「雖然」)」、「話順を取る(「因為」節構文)」や「前の談話につなげる(「如果」、「雖然」節構文)」という談話の情報構造に関わる用法から、「相手の評価に(不)同意する用法(「如果」節構文)」や「断言回避／話の唐突さを緩和する(「雖然」節構文)」などの対人的機能に機能拡張している。第7章の考察では、中国語の副詞節の非従属化構文は談話の文脈と照らし合わせなければ、意味・形式的に不完全な発話となることが明らかになった。一方、日本語の副詞節の非従属化構文については、副詞節の接続助詞は右の周辺部に用いられ、先行の談話文脈に依存せずにモーダル化しているほか、さらに「聞き手の認識状態の改変を促す態度を明示的に示す用法(ケド節構文)」、「聞き手に何らかの行為を要求する用法(カラ節構文)」、「勧め(タラ・レバ節構文)」などの間主観的意味に機能拡張していることが判明した。他方、英語おける「(従属節) 条件節+ポジティブな意味を表す主節。」という構文が高頻度で使用されているため、「(従属節) 条件節。[ポジティブな意味に限定]」という非従属化構文が生じると観察されている。このことは、非従属化構文の談話機能を研究するために、従属節の非従属化構文だけでなく、「従属節+主節」における主節の意味特徴とその生起頻度を分析の射程に入れる必要があることを示唆している。

以上の研究を背景に、第8章では、本研究の意義、非従属化構文に関する研究への示唆や今後の展望について論じている。